

さくらびと

千島桜

ほそかわごころ
細川呉港（会員）

数年前、北海道、札幌の知人の家を初めて訪ねた。老夫婦である。南に開いた日本式の庭園。真ん中に千島桜があった。千島桜はあまり背丈が大きくならないで、根本から灌木のように枝分かれして、鬱蒼と繁る———と想像していたがその家の千島桜は直径30センチ以上もある喬木で庭の真ん中にあった。40年前に釧路に嫁いだ娘が、老夫婦が家を建てたときお祝いに道東から苗木を送ってきたのだという。40年もたつと、千島桜とはいえ貫禄である。雪や寒さに耐え、北風にやや傾いてはいるが太い幹がしっかり立ち上がっている。枝が四方に広がって、庭に君臨していた。花は小さいが白く、小さな枝の先まで一斉につくから清楚で、それでいて華やかなところもあり、やはり「桜」の雰囲気は十分持ち合わせている。咲き始めは薄紅色で、花が咲くと真っ白、それから花の終わりは、多くの桜と同様に「赤化」してピンクが濃くなるという。以前、尾瀬の長蔵小屋に泊まったとき、



傍にやはり大きな千島桜があったが、ゆっくり眺めたのはそのときが初めてだった。こちらは灌木であった。よく知られているように、千島桜は、明治2年（1869年）に国後島から北海道根室に移植され、さらに明治36年（1903年）に市内の清隆寺に移植。今でも、清隆寺の桜は、千島桜の名所として有名である。昭和11年（1936年）に宮部金吾博士が「チシマザクラ」と命名した。今では北海道の各地に植えられている。特に官公庁の広い敷地に多く植

えられているのは、北海道ならではのこころだ。千島」と聞くと、なんとなく北辺のロマンも感じるし、また反対に失った領土とともに終戦時の悲劇も連想させて、哀愁もある。

初めて伺った家だが、市内から遠いせいもあり一晩やっかいになることになった。日頃は誰も使っていない2階の和室に通され、布団を敷いたが、すぐには眠れない。時計を見るとまだ9時であった。いつもは夜中の12時でも寝ない男だから、眠れるはずはなかった。もちろんテレビもない。畳の部屋に、ひとりぽつねんと取り残されたようだった。

気がつくと部屋の隅に古い本箱が置いてあって、さまざまな本が並んでいる。見るとはなしに、本の背を見ると、生け花や茶花、それに焼き物の本や写真集などがあつた。老夫婦が、若いときから、長い間お茶の先生をしていて、買い集めた本だろう。

お茶というのは、単にお茶のお点前やお作法を習うだけではない。床の間に掛かっている軸を読んで鑑賞しなければいけないし、もちろん茶碗や棗などの道具の美しさも見る。それから大事なものは茶花。四季折々に咲く花を、茶花という独特の侘で活ける。単に生け花という技術

だけではない。季節の変化を心で感じるとる気持ちも養成される。文武両道というけれど、お茶をすることによって、焼き物から、文学や詩、四季折々に変化する自然に、心を動かす感性をも学ぶのである。そういった主の心構えを、本棚に並んでいる本は語っていた。

本棚の一番下の段は、ファイルやスクラップブックが置いてあった。私はちょっとためらいながらも、スクラップを開いてみた。新聞の切り抜きや、雑誌の切り抜き、写真もあった。

そのうちのひとつ、ある新聞の切り抜きをなげなく読んだ。北海道の旧国鉄に長い間勤めた男の「思い出の記」だった。いつの新聞か分からないが、黄色に変色したその色から、20年も30年前のものと思われた。しかもその内容は、それよりもっと前からの話である。

JRといえば、最近北海道新幹線や、新しいリニア・モーターカーなどのニュースが話題をまいているが、旧国鉄というのは、もっと違ったイメージがあった。北海道である。ぼっぼやである。ぼっぼやと聞かなくても、われわれの世代は、国鉄職員といえば勤勉で実直な人柄を連想させる。生涯、ただひたすら勤務に忠実に、そして真面目に生きていく、そう

いったイメージが強い。同じ職員同士、仲間意識も強く、時間を守り、連帯して鉄道を守った。事実そういった人が多かったと思う。私の従兄妹にも国鉄マンがいたからである。

余談であるが、数年前、中国のホロンバイル平原の炭鉱の中を走る蒸気機関車の2人の乗務員の話が映画になった。炭鉱の名前そのままの『ジャライノール（扎賚諾爾）』という映画である。もともとは、旧シベリア鉄道を敷設したロシアが、沿線に開いた巨大な大露天掘りの炭鉱で、この広大な穴の中を、輪を描きながら石炭を穴の中から運び出すのに蒸気機関車が使用されていた。たくさんの乗務員が石炭にまみれながら働いていた。

主人公とその年上の相棒は、2人で蒸気機関車の運転手と助手としてコンビを組んで長年勤めていた。年はかなり違うが2人は兄弟のように仲良く、しかもウマが合った。その年上の相棒がついに停年を迎え、炭鉱を去ることになる。弟分の若い青年は、故郷に帰る兄貴分をどうしても途中まで送っていくという。退職する男は、何日もかけて、何度か乗り換え、遠い田舎に帰るのだけれど、青年はずっとついて行く。途中、心配になった兄貴分がついに弟分にもう帰って仕事に

復帰するように言う。しかし、追い払っても、追い払っても彼は黙ってついて来るのだ。

単にそれだけのストーリーだが、映画を見終わったあと、温かい人間同士の繋がりが胸に迫った。おそらく若い男には身内がいらないのだろう。小さいときから苦勞をしている。しかし過酷な炭鉱の列車の仕事の中で、やさしくしてくれたのは、兄貴分だけ。青年にとっては唯一の肉親のようなものだった。全編をとおして素朴な青年の明るい笑顔が印象的だった。鉄道に勤める人間同士の、心の絆を描いたいい映画だった。

話を新聞の切り抜きにもどそう。新聞に投稿した人は佐々木栄松（しげまつ）という釧路の人である。すでに国鉄を定年退職している。

話は自分の家の庭にある千島桜から始まる。その桜は樹齢が70年以上。背丈は高い枝で3メートルとちょっと。何本もの主幹が地面から四方に地を這うように出て、面積は畳6畳分だと書いてあるから、私が今晩泊まっている家の千島桜より全体としてはかなり大きいだろう。毎年、5月の中旬にたくさんあるすべての枝に、美しい白い花を無数につけるとい

う。その桜が、5分咲きから7分咲きのころ、友人たちを招いて質素だが、楽しい宴をした。毎年皆が集まって純白の花に見とれる。千島列島の寒気とシベリア降ろしに耐えて生まれた桜を実感するのだ。佐々木栄松は次のように回想する。

「T老人は私を幼いころから可愛がってくれた心の優しい人であった。私は彼に勧められ、また彼を慕って、同じ国鉄の職員になった。自分がまだ若い鉄道員のころ、Tは同じ鉄道員としてさまざまな助言をしてくれ、陰になり日向になり助けてくれた。しかし、勤務地が一緒だったのは最初のときだけで、あとは生涯、離れ離れだった。お互いに北海道を転々とした」という。

そのT老人が、転勤するたびに持って移動したのが、千島桜の鉢植えだった。栄松は休みをとっては、T老人の勤務先に会いに行き、自慢の桜を見せられた。

「そのT老人もついに定年になり、長年持ち歩いていた千島桜を落着き先の自分の庭に地植えにした。すると桜はみるみる大きくなり、枝を広げてみごとにあった。私は、前と同じように老人を訪ねては桜を鑑賞した。そのたびに小遣い銭を老人に持って行った。老人はとても喜んでくれた」。

その老人があるとき、栄松の帰りがけに、自分ももうこの桜は十分に見たから、栄松の家に移しかえるように言った。栄松は驚いて辞退した。その桜はT老人が生涯、北海道を果てから果てまで、転勤するたびに後生大事に持ち歩いて、苦菜とともにした桜だったからだ。そのことは栄松が一番よく知っている。

「元氣だった彼が急に亡くなったのは、桜を移しかえるように言ってから、間もなくだった。T老人は自分の寿命を知っていたのだろうか。もうあの穏やかな顔に会えなくなってしまう。もう小遣い銭も持つていくところもなくなってしまう。私は心に、大きな穴があいたようだった。私の生涯の先輩であり、友人だったからだ。千島桜は遺言どおり、今は自分の家の庭にある。老人の記念樹になってしまった。今でも先輩が私の庭にいるようでもある」と。

生涯、鉢植えの千島桜を大切にしていた国鉄マンが、停年を迎え、その鉢を地面に降ろし、みごとな花を咲かせた。その老人も亡くなって、今度は、彼を生涯慕っていた後輩の家に植えられている。その後輩も停年を迎える。こうして千島桜はT老人のやさしさや思い出とともに、後輩に受け継がれているのだ。今ではT

老人を知る国鉄の仲間が毎年栄松の家に来て、ささやかな花見をするという。

「この桜がある限り私の傍には、Tさんがいる——」と。

佐々木栄松は最後に、千島桜の利用法と手入れの仕方を几帳面に説明している。いかにも真面目な人柄を窺わせる。

まず、桜の実が十分に熟してから収穫する。真っ赤に熟した小さな千島桜の実には、紫を含んだ濃い紅色で、つぶすとすぐに紅汁が滴るほど。その汁で梅漬けをしないさいと。この実を染料にすると、いい色の梅漬けができるらしい。また、肥料のやり方は年に2回、木の芽が出る10日前後、すなわち5月初旬。2回目は新芽が伸びて、葉が茂る前、7月10ごろ。肥料は木の枝の先より20センチ内側に周囲6か所に穴をあけ、窒素肥料をやる。そのあとは、幹や枝があまり広がらないように、幹の「心」の留め方を細かに説明している。

2人の国鉄マンの傍で、生涯にわたって生きてきた千島桜。その千島桜に寄せる男たちの思いやりと人生。初めて泊まった旅先のがらんとした殺風景な部屋で、古い一枚の小さな新聞の切り抜きから、私の心に不思議な、それでいて充実感のある大きな世界が広がった。